

吉元昭治 著

『日本全国神話・伝説の旅』

今回、編集委員会から、若輩者の私に吉元昭治著『日本全国神話・伝説の旅』(勉誠出版)の書評依頼を頂いた。本書を拝見し、一見余りの重厚さに正直躊躇したが、著者・会員方々に胸を借りるつもりで書評を書くことにした。

この場で紹介するまでもなく、著者である吉元昭治先生は、先の戦争・戦後の復興の中で医学研究・開業・第一線の地域医療で活躍された豊富な臨床経験を有する研究者・臨床家であり、更には医学から見た道教・不老長寿思想・神仙思想に関する多くの研究・業績は本邦に留まらず世界的にも有名である。

先生は、昔の良き日本が失われつつある現状に危惧を抱き、日本全国の神話・伝説を収集・記録することにより、良き日本の姿を後世に伝承したいという崇高な目的で本書を執筆された。

まず著者は、北は北海道から南は沖縄と広域である日本各地に伝承される神話・伝説いわゆる太古から現代までという長い時間軸でのその地の自然環境・ヒトの地域社会を表す説話を対象にするという極めて広大な時空間を相手に、15年にわたる日本全国津々浦々800箇所以上の伝承地への体を張った現地調査を行った。次に、寺社・遺跡ごとに収集された由来沿革などの現地調査記録・フルカラーで紹介された調査地・各寺社の絵馬等の豊富な写真という一次資料を、主に正史・歴史書等に記載された説話・民衆によって伝承された口承文学・本邦と文化地理学的に強い関連性を持つ中国大陸・朝鮮半島の影響を受けた伝承等で多く登場する歴史的人物別に、第一部：日本の神話・歴史伝承、第二部：日本と中国、第三部：中国の神々、第四部：日本と朝鮮、第五部：いろいろな昔話、第六部：信仰のいろいろ、第七部：仏僧と伝承、第八部：女人哀史、第九部：沖縄の伝承、第十部：その他の伝承に分類され記述、これを基に日本人の自然・社会観、日本文化の根源を

約1,200頁にわたり追究している。

本書は、フィールドワークによる民俗学的調査報告書としての重要性に加え、フルカラーで紹介された調査地・絵馬等の豊富な写真は極めて視覚的且つ写真に含まれたさり気無い景色・絵柄など多くの情報は、過去の伝承のみならず将来の研究者にとって今である平成時代の地理学・社会学的研究の際に一次資料として極めて有用であると考えられる。

我々は、全体自然の中で周囲を大洋・海に囲まれ南北に細長く風土も多岐にわたる日本列島に生き物の一員として太古から現代・未来と生息し、海・大洋を介し大陸の激動の人間社会の影響を過去・現在・未来と受け続ける。我々は一体何者であり、このことを後世にどの様な形で伝承すべきか。このことは我々にとって永遠の追究課題である。著者は、本書の中で「このような命にかかわる目に何回か遭っても、今日なお生きて取材がつづけられたのは、何とかしてこの本を完成させた執念もあったが、何か不可思議な力が背中をおし続けていてくれたことを感じざるを得ない。ただ感謝あるのみである。」と述べているが、この言葉が私として本書における最も共感する言葉であり、本書は日本人とは何かを考える上で有用な一冊である。

私も、自分の出身地のことは他の地域の方々よりは多少は知っているつもりであったが、本書を拝読した際、自分の出身地に未見聞地があり、早速帰省時見学したくらい本書は北海道・本州・四国・九州の主要四島・多くの島嶼部まで詳細に記載され、記述の幅広さ・深さは驚異的で著者の情熱が行間に表れ、他に例をみない。

説話は、決して無意味に長い時をかけて伝承されているのではなく、当時の人々が後世に何らかの真実を伝えたいという強い意志において、今日まで伝承されている。説話を読む醍醐味は、説話

の中に隠された真実を探り出し、関連情報とつなぎ合わせ、分析・吟味そして何を真実として伝えたいか推測することである。本書に接した読者は、必ず推理のきっかけをつかみ、更には自らの経験を説話として伝承するかもしれない。

(高山真一郎)

[勉誠出版, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-20-6, TEL. 03 (5215) 9021, 2008年12月, 菊判, 1,264頁, 9,800円+税]

安室芳樹 著

『切手で綴る医学の歴史』

著者は医師であり、日本医史学会会員、日本医学切手友の会副会長で、これまでに数多く医学切手について国内の切手展にも出品され、大銀賞、金銀賞、銀賞など6回に亘り受賞されている超ベテランの切手コレクターでもある。

今回の『切手で綴る医学の歴史』の刊行の意図するところは、古代エジプトから現代に至る医学、特にヨーロッパ医学の歴史を中心に医学の歩みを辿ることにある。もとより切手だけで医学の歴史を論じることは容易ではない。何故なら発行される医学の切手の主体は人物が多く、時代を生きた証人として歴史を語らせることになるからである。しかもその発行数は各国共に極端に少なく、その認識度も国によって違い、医学の歴史を語らせるには一貫性を欠く憾みがある。こうした観点から著者は、各章の項目を設定し、登場人物を暦年風にアレンジするのではなく医学の歴史を優先して切手をアレンジし、そしてまだ切手に描かれていない人物・事項のために、積極的に他の郵趣材料（消印、風景印、メータースタンプ、はがき、封筒）などを多用している。即ち、各ページには平均半ページを切手及び郵趣材料のレイアウトに使っているが、この試みは少ない切手のアレンジの活用に成功し、読者をして飽きさせない内容としている。最近ではフレーム切手、P切手と、ある程度は思うままの意匠で切手が作れるようになったので、より充実した『切手で綴る医学史』の刊行も夢ではなくなったように思う。

本書の構成は5章からなっていて、各項目は、最初に要旨が数行に纏められ、次に本論が解説され、切手の説明が下段に提示されている。示された切手、郵趣材料はすべて著者私蔵のものという。

目次順に示すと次の様である。

第1章；古代の医学

1. エジプト・メソポタミアの医学, 2. ギリシャ神話と伝説の医学, 3. ギリシャ医学, 4. アレキサンドリア医学, 5. ローマ医学.

第2章；中世の医学

1. キリスト教の興隆とビザンチン医学, 2. アラビア医学の盛衰, 3. 西ヨーロッパの医学, 4. ペスト・レプラの流行とロイヤル・タッチ, 5. 古代医学の復興とスコラ医学, 6. 外科と解剖の萌芽, 7. 大学の設立,

第3章；近代医学の誕生

1. ルネッサンスと医学, 2. 解剖学の勃興, 3. パラケルズスとパレ, 4. 血液循環原理の発見と顕微鏡の登場, 5. 医物理学派・医化学派と体系学派, 6. 実験医学と啓蒙運動, 7. 植物学と医学, 8. ジェンナーと種痘

第4章；近代医学の発達

1. フランス医学の栄光, 2. ドイツ医学の近代化, 3. イギリス医学の系譜, 4. 微生物学の勃興, 5. 細菌学から免疫学へ, 6. 近代外科の夜明け, 7. 化学の医学への応用, 8. 精神・神経医学の近代化, 9. ロシア医学のあゆみ, 10. アメリカ医学の動